第284号　2025（令和７）年11月10日　発行

カトリック新潟教区報

編集・発行　カトリック新潟教区広報委員会
〒951-8106　新潟市中央区東大畑通1-656
TEL 025-222-7457　　FAX 025-222-7467
https://www.catholic-niigata.net/

教区の新たな組織体制について

新潟教区司教　パウロ　成井大介

前号の教区報ですこし触れた新潟教区の委員会と地区の組織体制の刷新について、ここで詳しくご紹介します。新潟教区では、地区、小教区、奉献生活者の共同体、その他活動団体が、２０２４年１月に出された宣教司牧方針に沿ってともに歩む道を進んでいます。この１年半の間、教区、地区、小教区、奉献生活者の共同体が、互いにつながって歩みをともにするためにどのような組織体制がふさわしいのか、宣教司牧評議会、司祭評議会、地区、各委員会に意見を求め、検討を進めてきました。その実りがこの新体制です。

ともに歩むために

宣教司牧方針は、「神の言葉を告げ知らせ（宣教）」、「秘跡を祝い（典礼）」、「愛の奉仕を行う（奉仕）」という、教会の本質を表す三つの務めに共同体としてともに取り組むための姿勢やヒントを示すものです。具体的には、交わり、宣教、参加という三つの柱をもって、歩みをともにしていくよう招いています。

これまで、教区レベルでの宣教司牧は各委員会が個別に活動したり、教区全体にとり組みを呼びかけたりしてきました。そのため、諸委員会の間で情報を共有したり、意見交換することはあまりありませんでした。また、委員長や委員は新潟の司祭や信徒が多く、そして委員会によっては委員長のみの任命で、委員がいないこともありました。

これからは、どの地区も、どの委員会も、互いにつながってともに歩むために、以下の図のように、宣教司牧評議会の下に委員会を置き、足並みをそろえて活動を進めていきます。なお、これ以外にも司教の諮問のための委員会などがいくつかありますが、今回は新体制に関連する六つの委員会のみ紹介します。

宣教司牧評議会と教区委員会の連携

これまで４月末に行われていた宣教司牧評議会は、今後11月に行い、教区全体の１年間の活動をふり返り、翌年の活動の計画を立てる場とします。１年間、神が教区をどのように導いてくださったのか、そして、次の年に向けてどのように招かれているのか、信徒、奉献生活者、司祭、司教がともに識別するのです。

各委員会には、基本的に宣教司牧評議会に参加する評議員が委員長または委員として任命されます。もしそれが難しい場合、委員長はオブザーバーとして宣教司牧評議会に参加します。宣教司牧評議会で話されたことは各委員会に伝えられ、各委員会で翌年に向けての計画を立てます。このように、宣教司牧評議会を中心とすることで、各委員会は教区全体の様々な情報を共有しつつ、連携して活動を進めることができます。なお委員長は司祭、奉献生活者、信徒を問わず任命されます。

教区と地区の連携

この体制は、教区レベルの委員会だけではなく、地区を運営する地区協議会をも繋ぎます。地区協議会は、すべての司祭、各小教区と奉献生活者の共同体代表、地区選出の宣教司牧評議会評議員、その他関係者によって構成されます。このうち、地区長と地区選出の宣教司牧評議会評議員は、宣教司牧評議会にも参加します。こうして地区の意見が宣教司牧評議会に反映され、逆にそこで話されたことが地区協議会の活動に反映されます。

宣教司牧評議会の下に置かれる六つの委員会

宣教司牧評議会の下に置かれる六つの委員会は、主に以下の役割を担います。

■宣教司牧推進委員会
－新潟教区宣教司牧方針の推進（取り組み呼びかけ、活動紹介など）。
－行事の計画、実施（教区信徒使徒職協議会の役割を受け継いで教区大会を担当。また聖年や宣教月などの行動呼びかけ）。

■養成委員会
－個々人の信仰養成と、養成者、宣教者となるための養成、ならびにチャプレンの養成が教区全体で行われるよう計画、推進。
－地区で行われる養成プログラムの調整。実施が難しい地区のサポートなど。
－シノドス的な教会となっていくための養成（養成委員会委員長はシノドス教区担当者を兼ねる）。

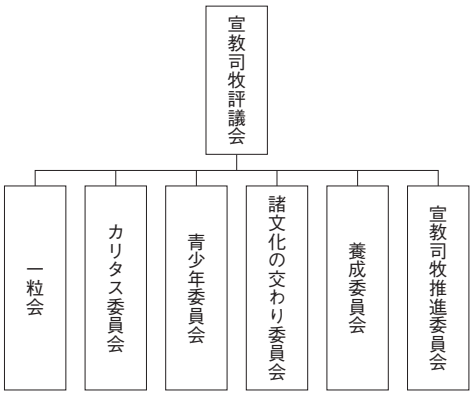
■諸文化の交わり委員会
－国籍に関わらず、教会共同体が様々な文化的背景を持つ人々の交わりのうちに一つになり、豊かになるよう啓発。
－個別の国や文化、言語のグループに対する、母国の文化を尊重した司牧の支援。

■青少年委員会
－青年から子どもまでがつながりを持って活動するための調整。
－各世代にふさわしい信仰養成のための調整。

■カリタス委員会
－各共同体で、社会、環境関係の事柄に取り組むための調整。
－カリタス委員会には正義と平和、部落人権担当者も加わる。

■一粒会（召命担当も加わる）
－司祭、修道者の召命のための取り組みを呼びかける。

２０２４年の年頭司牧書簡に書いたとおり、宣教司牧方針の取り組みは２０２７年に教区全体でふり返ることを計画しています。この度はじまる新体制も、必要に応じて細かい変更、調整をし、ともに歩み道を進んでいきたいと思います。



教区財政について

何よりもまず、厳しい社会情勢の中、日頃から教会活動のために、献金を含む様々な形で奉仕ししてくださっていること、キリストの福音をともに生き、伝えるというこの歩みをご一緒できていることに心から感謝いたします。

さて、わたしは昨年の半ばから、公式訪問で教会共同体を訪れるときに新潟教区の信者現勢の資料をお配りしています。統計によると、２０００年から２０２４年までの24年間で、新潟教区３県合計の人口は４９３万人から３９９万人（約19％減）に減り、信徒数は７５００人から６５００人（約13％減）に減少しました。これに対して、幼稚園などで働く司祭が減った結果、新潟教区本部が給与を支払う司祭の数は増えています。また、巡回教会や集会所などを含めた教会の合計数は38から１減の37です。佐藤敬一司教様や、菊地功枢機卿様が教区長であられた時に教書に書かれたとおり、新潟教区の財政は以前から厳しい状況にありましたが、上記のような状況にあって、最近は司祭会計の収支は赤字になっています。ここ数年、教区経済問題諮問委員会が検討を重ね、来年度からは新しい会計制度を導入するとともに、司祭活動負担金の協力を改めてお願いすることになりました。そのために、教区事務局長の大瀧神父と会計担当者が各地区を回り、会計説明会を開いてきました。皆様のご理解とご協力をいただけますよう、お願いいたします。

さて、使徒言行録の２章には、初代キリスト者共同体の生活の様子が描かれています。

「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。」

そして、このすぐ後には、ペトロとヨハネと出会った生まれつき足の不自由な人が癒やされます。祈ること。ミサをささげること。互いに交わること。愛の奉仕を行うこと。そのために財産を分け合うこと。初代キリスト者共同体は、これらのことを喜びと真心のうちにともに行っていました。それはきっと、イエスの十字架の死と復活を通して示された神の愛への自然な応答だったのではないでしょうか。

教会財政は、教会がその使命、すなわち宣教、典礼、愛の奉仕を行うためのものです。それはまさに、初代キリスト者共同体がそうであったように、私たちにとっても神の愛への応答であり、喜びと真心の表れなのです。その意味で、たとえ財政的に厳しい状態にあっても、共同体内部のためだけではなく、社会で困難にある人のために支援をすることを忘れてはなりません。私たちキリスト者にとって、献金をするのは組織を維持するためのものというよりは、信仰を生きるためのものなのです。

司祭の給与についてですが、この後説明があるように、小教区からの司祭活動負担金としての献金と、司祭からの寄付金（２０２４年は小教区からが22％、司祭からが78％）を原資としてまかなわれています。新潟教区の信徒、修道者、司祭、関係者の皆様が協力して支えてくださっていることに、心から感謝いたします。どうか、司祭の生活を支えるということも、教会活動の大切な一部分なのだという意識を持って、一層の取り組みをお願いいたします。

第22回カトリック新潟教区信徒大会が開催される

山形教会　パウロ　沼沢　敬志

２０２５年10月12日（日）から13日（月）にかけて、山形教会を主会場に〝ともに歩む　カトリック新潟教区宣教司牧方針にそって福音を生きるために〟をテーマに１４０人を超える方々が集まり「第22回カトリック新潟教区信徒大会」が開催された。

今年は聖年にあたり、山形教会が教区の巡礼教会に指定されたことから、ホテルを借りての開催から教会聖堂を主会場とするプログラムに変更し準備を進めてきた。また、長岡教会で開催された第21回大会は、コロナ禍により、多くの教会はオンラインでの参加であったが、今大会は八郎潟で行われた第20回大会以来７年ぶりに対面で開催する信徒大会となり、同じ場所で同じ時間を過ごす大きな喜びでもあった。大会に参加できなかった方へのオンラインの配信方法も当初はＺｏｏｍ配信を計画していたが、双方向での意見交換や分かち合いのプログラムではなかったことから、より視聴しやすいＹｏｕＴｕｂｅ方式に変更し配信が試みられた。

宣教司牧方針の三つの柱

「１、ともに交わりを大切にする共同体」

「２、ともに出向き宣教する共同体」

「３、ともにつながり参加する共同体」

を策定した背景や、取り組んでいくにあたり大切にしたいことなどを説明され、方針に沿った共同体をつくっていくために、「霊における会話」聖霊に耳を傾け、各自、自らが識別し、ともに形づくっていくことを大切にして欲しいと話された。また、宣教司牧方針に則った教区と地区の新体制について説明された。

基調講演後は、会場を教会近くのホテルに移し、新庄教会による踊により、秋田、新潟から参加された方々に歓迎の意を表し、懇親会が行われた。久しぶりに会えた喜びを神に感謝し、各地区から奉納された地酒を酌み交わしつつ、それぞれの教会のことを語り合い、また、新しい友をつくる楽しいひと時でもあった。

余興では、成井大介司教のギター演奏による聖歌の合唱のほか、有志による歌や楽器演奏、花形踊りなど、芸達者な方が大勢おり、大いに盛り上がった。

２日目は、各地区と奉献生活者の会代表の共同体から、宣教司牧方針への取り組み状況について報告が行われ、それぞれの共同体で外国籍の信徒を交えた取り組みが行われていること、信徒数が減少傾向の中でできることを模索しながら活動していることなど、他の共同体の取り組みを知り自分の共同体活動の参考となることも多く気付くことができた。

ミサは成井司教と司祭12名による共同司式で行われ、普段は新潟教区で各々に生活している人々が神によって結ばれていることを意識することができ、改めてともに歩む共同体の力を感じることができた。

ミサ後に、教区信徒使徒職協議会

総会と閉会式が行われ、教区委員会の再編に伴い、教区信徒使徒職協議会は、宣教司牧評議会の下に置かれる宣教司牧推進委員会に役割りが引き継がれること、大会名称は次回から教区大会とすることが説明され、約60年にわたる教区信徒使徒職協議会の活動に対して成井司教より謝意が述べられた。

次回開催の時期や開催地は、今後開催される宣教司牧推進委員会で検討されることが説明され、大会が終了した。

カトリック新潟教区会計制度の変更及び司祭給与制度の維持・拡大に伴う司祭活動負担金の協力依頼について

2025年6月15日発行の「カトリック新潟教区報」で概略をお知らせしておりますが、来年度から「教区維持費負担金計算方法の変更」を行います。

また、2007年度から旧新潟・新発田地区で始まった現行の司祭給与制度は、幼稚園長等を兼務する司祭の減少や高齢化が益々進んだことにより、制度の維持が非常に厳しい状況にあります。この度、すでに司祭活動負担金を納めていただいている小教区を含め、新潟県内の3地区と山形地区のすべての教会に改めて司祭活動負担金のご協力をお願いすることになりました。これまで司祭の生活費に関わる経費を司祭が所属する修道会に納めていた小教区も教区本部に一旦納入していただくよう変更となります。

以上の改正点につきまして新年度より実施したいと考えておりますので、信徒の皆様にはご理解とご協力をお願いします。

1．カトリック新潟教区会計制度の変更について

(1) 教区維持費負担金計算方法の変更

【2026年1月から変更】

(ア) 変更理由

教区維持費負担金の計算基礎となっている「現勢調査報告の信徒数」が「献金等納入者数」と乖離してきているため、教会の規模に応じた負担金額の算定が難しくなってきております。

また、負担金の算出には各小教区の信徒数よりも財政力を反映した方が良いという意見が多くあったことから、次のとおり負担金計算方法を変更いたします。

(イ) 計算方法の概要

【現行】信徒数で負担率を決定

各小教区の信徒数（現勢調査報告）	負担率
300人以上	15%
100～300人未満	12%
100人未満	10%

【変更後】献金額で負担率を決定

献金額合計	負担率
450万円以上	15%
150～450万円以上	12%
150万円未満	10%

※献金額合計には（一般、特別）寄附金収入も含めますが、実際の教区維持費負担金の計算に当たっては寄附金収入を含めません。

(ウ) 寄附金収入の会計処理について

この度の変更に伴い、新たに教区維持費負担金の計算基礎となる「特別寄附金収入」の内、カリタスジャパンや教区本部が呼びかけた災害支援金等については、2025年度決算から「指定献金収入」の「その他献金」に勘定科目を修正してください。

(エ) 教区維持費負担額の依頼について

例年どおり、2025年12月上旬に決算報告の提出依頼を行い、2026年2月中旬までに各小教区からの決算報告書の提出を受け、2026年3月中旬頃に教区維持費負担額のご依頼をする予定となっております。

(2) 信徒使徒職協議会負担金の取扱い変更

これまで信徒使徒職協議会負担金として、各教会維持費収入の0・4％相当額を教区本部を経由して同協議会に納入いただいておりました。

2026年度からは信徒使徒職協議会に代わり、宣教司牧推進委員会が教区大会の開催運営を担うこととなるため、次のとおり取扱いを変更します。

・名称を「教区大会等開催経費負担金」とし、各教会の負担割合は従前どおり0・4％とします。

・会計は同協議会から教区本部に移管することとし、特別会計として経理します。

2．司祭給与制度の維持・拡大に伴う司祭活動負担金の協力依頼

(1) 司祭給与制度の概要

現在、教区本部から給与を支給している司祭の基本給は月額125、000円、期末手当は年2か月で、基本給から社会保険料の自己負担分、所得税、住民税を差引いた手取り額、約11万円が実質生活費となっています。

園長給や年金等を受ける司祭はその収入を持って生活費に充て、超過額は教区本部に司祭寄附金として納入し、不足する場合は教区本部から別途支給しています。

教区本部は園長給等の超過分やチャプレン報酬等の司祭寄附金と各小教区から納めていただく司祭活動負担金を原資に給与支給司祭に給与・賞与をお支払いしております。

(2) 司祭会計の収支状況

ここ数年、教区外からの寄附金等を除く司祭会計収支額は赤字の状況が続いています。

主な要因は、幼稚園等からの給与支給司祭が減少し、教区からの給与支給司祭が増加したことによるもので、教区外からの寄附金等がなければ赤字が生じており、このままでは司祭給与制度の維持が困難な状況になっております。

【司祭会計収支状況の推移】（単位：千円）

	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度	2025年度（見込）
司祭寄附金（収入）	19,528	15,169	17,600	18,750	19,700
司祭活動負担金（収入）	5,342	5,752	5,146	5,225	5,200
収　入　計	24,870	20,921	22,746	23,975	24,900
司祭人件費（含法定福利費）（支出）	20,610	23,270	24,882	27,246	28,600
司祭会計収支額	4,260	−2,349	−2,136	−3,271	−3,700
教区外からの寄附金等（収入）			6,000	10,660	3,100

(3) 司祭活動負担金の協力依頼

司祭給与の基本的な原資は司祭寄附金と司祭活動負担金になります。その内、司祭寄附金は幼稚園長の退職により2026年度以降大きく減少する見込みです。今後も新潟教区の司祭給与制度を維持して行くためには、各小教区からの司祭活動負担金の増額が大切になります。

司祭評議会や昨年度実施した会計説明会の際にも、各小教区の財政力を反映した目標額を示して欲しいとのご意見が多数ありました。

教区本部といたしましては、決算確定後の教区維持費や建設共済基金負担金等の納入依頼に併せて、司祭活動負担金の目標額を各小教区にお伝えしたいと考えております。

各小教区におかれましては、司祭活動負担金の目的をご理解いただいた上で、信徒の皆様にご協力の呼びかけをお願いいたします。

（新潟教区事務局長　大瀧　浩一）

ひとりで悩まず
わたしたちにご相談ください

カトリック新潟教区
セクシャル・ハラスメント相談窓口

司祭・修道者による未成年者性虐待と
セクシャル・ハラスメントについての
窓口です

TEL 080－8912－8758

受付 毎週火曜日　13：00～14：00
（除く祝祭日）

2025年 カトリック新潟教区平和旬間講演会開催

7月27日（日）午後1時30分より、2025年カトリック新潟教区平和旬間行事としての講演会が、カトリック新潟教会カトリックセンターを会場に開催された。今年は新潟教区正義と平和委員会（委員長：佐藤勤神父＝柏崎教会、当時）と、同カリタス委員会（委員長：岡秀太神父＝寺尾教会）の共催で、テーマは「新潟県におけるフードバンク活動団体の働きの状況　子どもの未来応援プロジェクト」について。当日は猛暑日とあって参加者は10数名ほどであったが、新潟県フードバンク推進協議会事務局長・小林淳氏の講演に熱心に耳を傾けた。

なんとかしなければ

講演はまず、2つの問いかけから始まった。「迷子になった子どもに出会ったら、あなたはなんといって声をかけますか？」そして、「あなたの子どもが川で溺れたら、あなたはとっさにどうしますか？」そして、小林氏は会場の一人ひとりにマイクを向けて回った。

もちろん、溺れている人を見かけたとき、その人が大人であれ子どもであれ、自分が飛び込んで救助しようとするのは危険だ。それでも、多くの人の感覚として「なんとかして助けなければ」という気持ちが働く。講演はそこから始まった。

フードバンクについて

「フードバンク」とは、食品関連企業等から寄贈食品を集め、福祉施設や生活困窮者支援団体等に無償で提供する仕組みのことで、フードバンク団体は、原則として子ども食堂やその他の社会福祉施設等の団体に支援するということになっているが、現実にはひとり親世帯や生活困窮世帯からの相談が多く寄せられるという。

新潟県内では、コロナ禍以前は「フードバンクしばた」「フードバンクにいがた」の2か所であったが、その後増加し、2020年には「新潟県フードバンク推進協議会」が発足した。

いのちの危機

小林氏は同協議会の事務局長としてひとり親世帯の相談窓口を開設、日々寄せられる様々な相談に対応してきた。その多くは、公的支援があっても何らかの理由で、そこからもれてしまう人からの相談だという。とりわけ痛ましいのは、生活の困窮から、子どもたちが卒業や進学を諦めざるをえなくなり、そこから自死に至るケースがあるとのことで、そうなる前の支援が求められる。

聖年、この恵みの年に

今年、カトリック教会は「希望の巡礼者」というテーマを掲げて聖年を祝っている。小林氏によると、こうした相談活動に積極的に取り組んでくださるのは、①自らもひとり親世帯で育った人、②学校の先生、③宗教を問わず聖職者や信徒　だという。改めて、イエスの弟子として歩もうとしている私たちには、無関心ではなく隣人の必要に心を寄せつつ、時宜にかなったかかわりをもって、ともに歩み続ける恵みを願いたいと思う。（新潟教会　野村 みか）

地区便り

秋田地区

神言会創立150周年記念講演会

秋田教会　パウロ三木　鈴木　智

2025年6月8日（聖霊降臨の祝日）10時30分、カトリック秋田教会聖堂で、秋田地区信徒養成講座として神言会創立150周年記念講演会が日本管区長サンティアゴ・エドガルド・ジュニア神父様（ディンド神父様）を講師にお招きして開催されました。司祭、修道者、信徒、約180人の参加がありました。県内の各教会からもたくさんの信徒が参加されました。

講演の模様をごく簡単にお伝えします。

あいさつ

今日、聖霊降臨の日にあたりこの日を設けてくださったことにまず感謝したいと思います。非常に意味深いものであります。アーノルド・ヤンセンは祈りを大切にする創立者であり、毎晩ヤンセンの家族の祈りの中で、ヨハネ福音書の序文が朗読されていたという事です。私達にとっては、アーノルド・ヤンセンの祝日の時に朗読される福音なので、それも皆さんと一緒に体験していただきたかったのです。そして祭壇の前に置かせていただいたものは、聖遺物です。聖アーノルド・ヤンセンの小さな骨と聖フライナーデメッツの使っていた修道服の小さい布切れが入っているものです。これが私達にとって創立者とつながるしるしともなります。

今日ここにいらっしゃる多くの方、また帰天された方々も思い起こしながらこの講演会を始めていきたいと思います。

創立者　聖アーノルド・ヤンセンと神言会

1837年、ドイツのゴッホで生まれ11人兄弟の2番目の子供として育ちました。アーノルド・ヤンセンは大変熱心なカトリックの家庭の中で厚い信仰が育てられました。両親は三位一体への信心、聖霊に対する信心やロザリオの祈りを大切にし、毎日子供を集めてお祈りしていたそうです。アーノルド・ヤンセンは厳しいお方で、歌は下手だったと言われています。信仰に堅く神のみ旨を行うことに頑固な人でした。神言会を創立する前には、オーストリア、オランダ、ドイツの司教たちのところに創立の為の相談に赴いていました。神言会を創立しようとしていた頃は、ドイツの教会が激しく迫害されているビスマルクの時代で、文化闘争という状況の中で修道会の創立は人材的にも金銭的にも非常にふさわしくない時代でした。しかし、キリスト教の一致と、みことばがまだ知らされていないところに福音宣教に努める、或いは派遣する修道会を創立する、ということが自分としては固まっていました。そして修道会は、ドイツで創立するのが無理だった為、隣国オランダのシュタイルという小さな町で4人の司祭とともに1875年9月8日マリア様の誕生日に合わせて生まれました。その困難、苦難の中で生まれた修道会として、ミッションハウスと言われる宣教修道院は、確信を持って始まりました。「宣教神学校から何かが生まれるとしたら、それは神の恵みのおかげであり、もし何も生まれないのなら、私たちは胸を打ち、自分たちがその恵みを受けるに値しないということであったことを認めます。」これが神言会会員に今も続く創立者の心なのです。そのことは150年、多くの波を乗り越えていつの時代も今の時代も感じられていることです。

最近、総本部が出した記事の中で、神言会の名前「神のみ言葉の会」について触れられています。教皇レオ13世の時に、神言会は「神のみ言葉の会」という名前は相応しくないと批判を受けていて「神のみ言葉を礼拝する会」に変えるべきだという動きがあったそうです。我々は、神のみことばとその奉仕への各々特別な献身を本会の名のうちに表現しています。みことばの生命こそ我々の生命であり、そのミッションこそ我々のミッションである。と強く主張し、その時レオ13世により、この会は「神のみ言葉の会」（SVD）のままでなければならないと確認され、今に至るまでその名前のままになっているわけです。私達の神言会という名が私達のミッションであるならば、まずイエス様に戻らないといけません。なぜなら、イエス様が何をおっしゃったか、何を教えたか、何を行っていたか、イエス様に基づいて自分達の使命、召命を忘れることなく実現していくというのが、アーノルド・ヤンセンが生きてこられた精神だからです。

創立して4年後の1879年、フライナーデメッツ神父とアンツァー神父の2人を中国に派遣しました。

簡単なミッションではなかったようで、フライナーデメッツ神父の生き方が私達神言会にとって模範となる生き方となりました。ミッションを果たすために現地の人と同じ格好をし「すべての国の人が理解できる言語、それは『愛』である」という言葉を残しました。１８７５年の創立の年の12月には11人しかいませんでしたが、アーノルド・ヤンセンが亡くなった１９０９年には１０１８人に増えました。

そして、１９０７年３人の宣教師が日本にやってきました。横浜港から入って、秋田、新潟から始まった神言会の宣教が今は、日本管区１１２人の司祭、修道士によって成り立っています。18か国から来ている会員たちが集まっているわけです。

２０２４年神言会総会

去年の６月中旬から１ヵ月かけて私達は全世界から代表がローマに集まり、６年に１度の神言会の総会を行いました。代表１２０人の会員が集まって、これからどこに行けばいいかということを話し合いました。その時のテーマは「あなた方の光を人々の前に輝かせなさい」（マタイ福音書５章16節）、サブテーマは「傷ついた世界の中における忠実で創造性豊かな弟子たち」です。

聖書に基づいて、聖書に戻る私達は、私達が今置かれている現状、派遣されている所の状況を知らなければならず、一方的に宣教に努めることは難しいと感じられます。皆何かの傷を抱えて生きていこうとしています。神言会の持っている傷、私達が与えた傷も含めてこの世の中で黙想しなければならないのです。ちょうどこの期間には、シノドスの歩みがすすめられていて、サブテーマと重なり合ったような気もします。ともに歩んでいかないと、みことばが伝わらないことが多くなるのではないか、皆さんの感じていることを知らないままで一方的に宣教しても伝わらないのではないか、ということがこの審議の中で表れていました。このことを各共同体に伝え、どのように耳を傾けてどのように応えられるか、そしてともに歩めるのかが大きな課題です。

皆さんとともに歩むということは「まことの光である主イエスキリストを輝かせなさい」というメッセージにつながっているわけです。神様に呼ばれて使命が与えられて、イエス様を知ることによって見たこと聞いたことを伝えていく事が、主キリストを輝かせるという事なのです。

みことばを述べ伝える使命について総会の中では、諸文化の交わりについても話されました。この会を通して議論することでより豊かになっていき、聞き入れることでお互いを尊重しながら進んでいく大切さを再確認しました。それぞれの違いを認めながら、私達は同じ使命を持ち、神様に向かって歩んでいくという大切なポイントが修道会でも教会の共同体の中でも感じられるのではないかと思います。

神言会の取り組み

神言会には４つの特徴的局面があります。

1　聖書使徒職。聖書講座、講演会など。

2　コミュニケーション。動画作成、YouTube配信、SNS活用、など。

3　宣教意識の高揚。雑誌作成、イベント。

4　JPIC正義と平和と被造物の調和。

おわりに

聖アーノルド・ヤンセンの霊性、まさにそのお祈りや信心を守りながら、私達は宣教修道者であることを忘れることなくこれからも派遣された地に努めさせていただきたいと思います。

最後に、神様の豊かな恵みが注がれますように保護の聖人への祈りを祈りたいと思います。

秋田教会聖堂にて

上越地区

初誓願式の喜びと感謝

上越聖クララ会修道院

今年６月21日、カトリック高田教会で長岡教会出身、私達の姉妹の初誓願式を行わせていただきました。本来、禁域の誓願を立てる私達は修道院の聖堂で誓願式を行いますが、地元出身の姉妹でもあり、教会関係、仕事関係でこれまで多くの方々が祈り、支えてくださった事を思い、教会でさせていただくことにしました。

誓願式のミサの中で創世記の箇所が読まれました。アブラハムが故郷を出て神様が示される地に行くように神様からの命令を受けて、アブラハムは神様の言葉に従って旅立ちました。修道院に入るとは先ず家族や親しい人から離れて、神様の私に対する望みを探し求める旅に出ることです。その旅はイスラエルの民と同じでほとんどが砂漠です。パソコンや携帯、今の時代を生きるのに必要な物も一度捨てて、これまでの生活とは違った価値観に基づいた生活を選ぶことになります。そして友人、同僚などとは違った、ただキリストによって呼び集められた姉妹との共同生活を体験します。これが志願期です。そして修道生活、会の霊性などを学びながら自分と神様とに向き合いながら召命を確認します。この期間が修練期で２年間続きます。この間、様々な試みを通してキリストからの招きを確認します。自分をこれまで守って、支えてきてくれた関係、物から離れて修道生活を通して何を頼りに生きようとしているかを識別します。この間、私たちは自分の弱さ、無力さをとことん経験します。この時期を経て奉献生活への望みを本人と共同体で確認し、識別をして共同体に受け入れられて初誓願式が行われます。その時の心境はマニフィカト、聖母賛歌と同じです。そして、この度の初誓願式の時に神様とこれまで祈りの内に支え、励まし、待っていてくださった方々に心からの喜びと感謝を共にさせていただきました。成井司教様は説教の中で故フランシスコ教皇の観想生活に関する憲章を引用しながら私達の使命を説明してくださいました。誓願式後、何人かの方々から初めて誓願式が何かがわかりましたという感想をいただきました。世界中で絶え間なく神への賛美と感謝の祈りが観想修道会を通して捧げられています。私達にはその中で新潟教区の為に祈る使命もあります。これからも喜びと感謝のうちにこの使命を十全に果たしていけますようにと心から願っています。

中越地区

中越地区大会
見附教会にて開催

中越地区会長
フランシスコザベリオ　多田　健一

６月１日見附教会に80名ほどが集まり地区大会が行われました。新しい地区割（三条、加茂、見附、栃尾、長岡）になってから初めて行われるこの大会は、まず成井司教様の司式によるミサから始まりました。

その後「聖年と教皇フランシスコ」というテーマで講話をいただきました。フランシスコと一人の子供との愛に満ちた映像には皆さんが感動していました。

当初は昼食を食べないで解散という案もあったのですが、コロナ後、初めて食事を共にすることにしました。食事をしながら分かち合うことは一番の交流になるということで、あらかじめ分けられたグループでテーブルを囲みました。

そして今回はなんと見附教会のお母さんたちが食事を作ってくれたのでした。フィリピンの方々によるチキンお粥や日本の煮物やお漬物は絶品でした！

私もずっと地区大会には参加していますが、こうやって食事まで作っていただいたのは、たぶん初めてのような気がします。食事のあとにはフィリピンの方々のダンスが始まりました。そしたらベトナムの子たちもじっとしてはいられない。一緒に踊って、めちゃくちゃ盛り上がりました！私も一緒に踊りたかったんですがね、グッと我慢しちゃいました。

午後からはグループに分かれての分かち合いとなりました。初めて会う人も多く、自己紹介なども行われました。信仰からくる体験談や考えを共有することは初めて会う人をずっと近づけることができますね。とても実りある時間になりました。

最後にはロザリオを5連唱えます。長岡からスタートして次はフィリピンの方々、栃尾、見附。そしてベトナム語、最後に加茂、三条。それぞれが1連唱えた後に賛美の歌を歌いました。そして「あめのきさき」を3か国語で歌って締めくくりました。

このロザリオのやり方はとてもよかったので次回長岡教会でも取り入れてみようと思いました。

見附教会の皆さんの受け入れ準備、そして運営、大変だったと思いますが、おかげさまで素晴らしい大会となりました。本当に感謝です！

来年は三条教会で行われる予定です。いろいろな交わりがありますように、そして多くの人がそこに喜びをもって参加することができますように祈ります。

下越地区

新潟教会2025年通常聖年巡礼指定聖堂としての活動と現聖堂100周年に向けて

新潟教会小教区評議会・新潟カテドラル保存会

2025年通常聖年の今年、新潟教区の巡礼指定聖堂となっている新潟教会（新潟カテドラル）には多くの巡礼者が訪れました。特に6月から夏休み期間中は観光客を含め巡礼者が多かったように思います。以前から聖堂に巡礼ノートを設置していて、訪れてくださった皆さんが神様への感謝や訪問記などを記していただけるようにしていますが、聖年開幕以降のページには、全国各地の教会から、また、海外からの訪問者が多かったことが記録として残されています。日曜日の主日ミサにも、巡礼者のみなさんが参列して一緒に祈りを捧げてくださいました。ここに、巡礼指定教会として活動の一部を紹介します。

先ず、最初に取り組んだことは、正門脇の掲示板に、聖年ロゴマーク（3か国語：日本、英語、ベトナム語（以下同じ））を掲示し巡礼指定聖堂であることの印を掲示し巡礼者を歓迎する気持ちを表しました。その後暫くして、教区事務局から、聖年マスコット〝ルーチェと仲間たち〟の活用の紹介があってからは、私たち信徒の気持ちも爆上がり、同掲示板と構内にポスターを掲示して教会内の〝聖年ムード〟を高めました（写真①②）。

写真①
新潟教会聖堂と掲示板

写真②
ポスター掲示

他教区や海外の活動をヒントとして出されたアイデアは、〝新潟教会を巡礼した記念となるように〟という気持ちを込めて、インスタグラムなどのSNS投稿撮影用のマスコット・ボード&ペープサートの製作・設置（写真③）と、3か国語の〝聖年の祈り〟を集めたパンフレットの設置・配布（写真④）というものです。手作り感満載ですが、ボードとペープサートは、海外出身の信徒たちには大変好評で、カテドラルを背景に撮影する光景をたくさん見かけることができました。母国のご家族やご友人への近況報告の一つとなり母国のみなさんとこの新潟の地が繋がることができたとしたらとても嬉しく思います。また、祈りのリーフレットも何度か増刷をしましたので、手に取ってくださった方は多かったのではないかと思っています。聖年に全世界が心を合わせて祈ること、そのツールとして役立つことが出来たとしたら巡礼教会としての役割を少し果たせたように思います。

また、訪問した巡礼者のために、2000年の聖年時に製作した〝教会スタンプ〟を探し出してスタンプ台を〝巡礼ノート〟の脇に設置しました。スタンプ台の新潟教会からのメッセージには、信徒からのアイデアにより、2年後に迎える現聖堂100周年のためにともにお祈りくださいというメッセージを添えさせていただきました。

新潟教会に巡礼に訪れたすべての人々が希望をもって歩み続け、巡礼後も神様の豊かなお恵みがありますようお祈りしています。

さて、新潟教会では、現聖堂や歴史あるパイプオルガン等を保存するための活動の場として〝新潟カテドラル保存会〟という組織を立ち上げました。歴史的な話題としては、来年、初めて洗礼を受けた信者が誕生してから150年目を迎え、また2年後の2027年には現聖堂が100周年を迎えます。ここ新潟カテドラルは、最近は、新潟市の観光地としても紹介されるようになり、歴史的建築物の一つとしても注目され、観光客も多く訪れるようになりました。もっとも、以前から、仕事帰りにお祈りに立ち寄ってくださる方々もいらっしゃると聞いていますし、毎日3回定刻に響き渡るアンジェラスの鐘の音も日常の身近なものとして新潟の地に根付いているのではないかと思います。

写真③
ペープサート

写真④
パンフレット設置と聖堂内

現聖堂100周年に向けて、この歴史をPRすべく、ポスターを制作し（画像①）、掲示版や構内に掲示して訪問される方々へ周知するとともに、教会ホームページでは〝聖堂100周年ギャラリー〟コーナーを設けて昔の写真を掲示して教会の歴史を紹介する活動も行っています。

画像①
教会歴史PR

一方、喫緊の課題として、来年、聖堂の屋根と外壁の大規模修繕工事を計画しています。1996年に大規模改修を行ってから30年経過していること、また中越地震や能登半島地震などの大規模地震による損傷を修繕する必要があることから100周年を迎える2年後までには何とか竣工させられないかと取り組んでいるところです。

なお、100周年に向けた新潟教会の取り組みはホームページをご覧いただければ幸いです。

新潟教会ホームページ
https://cathedral-niigata.jp/